

学校新聞創刊のころ

林 璧（高5回）

今私の手元に一枚の集合写真（左頁の写真）がある。裏面に「昭和28年飯田高校卒業の折。新聞部一同」と書いてある。

先生方は前列中央右に正木博次先生（新聞部担当主任）、左に水野都沚生先生、左端に矢沢博先生、後列に栗沢祐治先生、何れも国語科の先生である。生徒は前列に3年（高5回生）男子と女性、後列に下級生男子である。

3年男子は右から奥村知美、川杉豊（部長）、中島俊彦（營業課長）、横田隆司、林璋（編集課長）、女性は左から3年生の野々口恒子、2年生の丸山陽子、北原良子、他1名。後列には2年生の吉沢正文（次年度部長）、稻垣寛、下平道利、小島正之、羽生哲夫、光沢昭彦君の顔も見える。

部員たちは皆仲が良く、結束も固かつた。登校すると直ぐに校舎中央裏口から出て、体育館、図書室に向かう曲がり角の右側にある部室に行き、放課後もこの部室に



● はやし・あきら
高森町出身。東京大学理学部地学科地質鉱物コース卒。三井物産の非鉄金属部門で鉱石輸入、海外資源開発、製鍊所建設・経営に参画。現在東京都杉並区在住。同区内の角川庭園にて短歌、俳句講座に出席中。

学校、PTA、同窓会の3者共同発行

創刊号に詳細が記載されている。「新聞発行を満場一致で可決」との表題のもと、「昭和26年12月17日校長室で開催されたPTA評議員会で満場一致で可決、組織は学



校、PTA、同窓会の3者共同発行として主として生徒の手で

作らせる」と書かれている。また「会計は独立採算制として父兄側毎月拾円負担を承認、新聞発行の月より増徴する」とも書かれている。設立に関し3者が特に留意したことはトップ記事に下記記載がある。「公的学校の新聞として政治活動等は紹介する程度に止め参与してはいけない」と政治活動の温床となることに警告を発している。当時は日教組の左翼運動が盛んで、全学連の政治活動も活発になりつつあり、やがて樺美智子さんが死亡した60年

安保へと発展する萌芽を感じられる頃であった。

部員は学校が指名

新聞部が他の学芸部、運動部と異なる主なる点は次の2点である。第1に部員は学校側の指名であったこと。第2は独立採算制であつたことである。学芸部、運動部などの班も設立は生徒主体で、入部は各自の自由意思で決められたのに、新聞部は学校など3者の共同設立なること考えると、部員が学校側の指名であつたことやむを得ないと思うが、さして文才があるとも思われず、文学部、図書部などにも属していなかつた私が何故選ばれたのか未だに不明である。会計が生徒自治会から独立していたことは事実で、第2号記載の自治会の予算にも、芸部、運動部は入っているが新聞部は入っていない。広告収入が主たる財源であったので、担当者は広告集めに苦労した。

創刊号の謎

創刊号1面トップ記事は、横書きのカットが「我等待望の新聞創刊さる」と羽生校長の揮毫で図案は吉川安雄教官と書かれている、見出しが「三位一体の協力こそ本校新聞の使命」となつていて、その横に小さな字で「新

聞部長城田
久和、編集
課長中田鉄
弥は学校長、
同窓会、P.T
A会長から
次の談話を
得た」と書
かれている
ので驚いた。

両君とも同期なので知り合いはあるが、新聞活動を一緒にした覚えが全くなかったからである。私の記憶では部長の川杉豊、営業の中島俊彦、それに編集の私が主なメンバーでその他同期や下級生の部員と新聞発行をしていたと思っており、城田、中田両氏の記憶が全くない。現在愛知県在住の中島俊彦君に聞いたところ、同君も2人と新聞作成の記憶はないと言う。川杉君は故人故聞くすべもないが、愛知県在住の城田君と連絡がつき、問い合わせたところ次の回答を得た。意外にも新聞部長は水野先生から指名されていたので知っていた。但し記事作成、編集には全くノータッチで手伝ったのは次の2点のみと説明あった。一つは同窓会長写真の入手に飯田病院



長を訪ねたこと、もう一つは新聞校正のため水野先生と松本に行つたことであると。

飯田高松高校新聞の題字下に発行人正木博次、編集人城田久和と書かれていることから、登記上、名目上の部長は城田君であったことは事実で、3月15日発行の第2号、我々が3年生となつた昭和27年4月2日発行の第3号も編集人は城田君のままである。第4号以降は私の手元にないので、何時部長が川杉豊君になつたか不明で、ひよつとすると卒業までこのままであつたかも知れない。

こうなるとトップ記事を書いたのは中田鉄弥君か。中田君がサッカー部で多忙であった事を考えると、これも名目上で、実際の執筆者は別の人、若しくは先生であつたかもしだれない。中田君も故人ゆえ確かめようがない。私自身も編集を担当していたが、創刊号までは残念ながら記憶がない。新聞部が学校主体で設立されたこと、部員は新聞作成の経験がないのに、先生は水野先生のように記者の経験を考えると、創刊号に關しては先生主導で記事を書いたとしても不思議ではない。但し川杉豊（部長）、中島俊彦（営業）、林璋（編集）の体制が整つてからは、学校側の参与、干渉は全くなかった。

校、高等学校校史には「初代編集委員長は川杉豊（高5）」と記載あるゆえ、創刊号はさておき大半の実質的部長は川杉君であつたと言えよう。また印刷は松本の「信州印刷」で、校正をやり、刷り上がつたインクの匂いのする新聞の束を抱えて帰飯したと、2代目部長の吉沢正文君の回想録が残つてゐる。

忘れられないトピックス

①印刷は松本で

創刊号題字下の印刷所の欄は「信州印刷株式会社（松本市巾上町三五三）」と書かれている。当時の印刷は植字印刷のためゲラ刷りの校正が必要で、部員は2人一組で早朝飯田を出発、校正の上、刷り上がつた新聞を持参帰飯した。学校活動と言うことで、出席あつかいにされたと記憶している。

②創刊号広告の店名を間違える

創刊号は「祝創刊」を付して、同窓会長、県会議員、PTA会長、病院、映画館、書店、写真店など多数の広告を出して貰つたが、「平安堂書店」店主からうちは「書店」の字は付かない。こんな間違いをされでは、広告代を払えないといふ、こつぴどく叱られた。止むを得ないとかえらうとしたら、「まあ待て、可哀そだだから払つてやる」

と言つて代金を払つてもらつた。店主は高校の先輩で温情を感じたと、中島俊彦君が思い出を語つてくれた。第3号は「平安堂」に修正されて、広告掲載がある。

③カットは美術班部員が協力

新聞は見出しどカットが重要である。記事や広告のカットに美術班の2年生佐野克子さんが協力してくれた。体育館裏の部室で暗くなつても一人で図案の作成をしてくれ、申し訳ないとと思う気持ちと、出来上がつて行く見事な図案を彼女の傍らで待つ楽しみ半々で、カットを受け取りに行つたものである。

④風越高校との交流

学校新聞に関しては風越高校の方が先輩で参考になるため、数回の会合を持った。部長は座光寺珊瑚子さんと云う、色白の美人で住まいが私の市田村の先の山吹村であつたので風越高校の会合の帰途、一緒に電車で帰つたりした。勿論同方向へ帰る部員も一緒であつたが。思い出は運動会に招待されたことで、招待席に数名の我が校新聞部員と共に座り、ブルマーテ姿の女性の行進を眩しく拝見した記憶がある。

以上情報、資料提供に協力してくれた、澤柳紀彦、城田久和、中島俊彦、中島満三（第2号論説の執筆者）諸氏に改めて謝意を表する。